

ペドロのふしぎな話      ベネズエラ

昔むかし、あるところに、ひとりの農園主がいました。その一族は、あたりでは名門として聞こえていました。

ある晩のこと、家族みんなで食事をしていると、家の前で呼ぶ者がいました。召使いが見てきて、いいました。

「旦那さま。馬に乗った男が参っております。お話があるそうです」

農園主は席を立て、出て行きました。

外に出てみると、闇の中に、馬に乗った大きな男がいました。男はあいさつをしていいました。

「盗賊の一味がこのあたりをあらしまわっているのだ。戸締りをして、外に出ないように。それから、若い者をひとり貸してほしい。盗賊どもをひとつとらえようと思うので、手伝いを集めているのだ」

農園主は、

「お知らせくださってありがとうございます。それでは、一番上の息子をやりましょう。

ここでは一番の乗り手ですし、鉄砲の腕もだれにも負けやしませんから。それで、どのくらい家を空けることになりましょう」といいました。馬に乗った男は、

「明日にはもどれるだろう」と答えました。

「分かりました。一日くらいなら、たいした準備もいらないでしょうから、すぐにお供をさせましょう」

農園主は、一番上の息子のペドロの馬にくらをつけさせました。ペドロは、鉄砲を取ると、両親と弟妹たちに別れを告げて、馬に飛び乗り、男といっしょに出かけて行きました。

真夜中過ぎに、男たちの一団と落ち合い、みんなで盗賊の一味を追いました。ペドロを連れてきた男は、実に見事な統率ぶりで、盗賊たちのほとんどを撃ち殺したりとらえたりしました。けれども、ひとりだけは取り逃がしてしまいました。ペドロは、その後を追いました。

ペドロは、馬を飛ばしてどこまでも追って行きましたが、あたりが白み始めても、なかなか追いつけませんでした。盗賊は、大きな川を渡ると、不意に姿が見えなくなりました。

ペドロも、あとを追って川を渡りました。川の向こうは、ペドロの全く知らない土地でした。遠くに家が一軒見えたので、行ってみると、そこは宿屋でした。ひと晩じゅう馬を飛ばして疲れきっていたので、ペドロはそこに泊めてもらうことにしました。

ぐっすり眠って目を覚ますと、もう夕方になっていました。宿屋の主人に帰り道をたずねましたが、話がほとんど通じません。聞いたことのない言葉で主人が話すので、ペドロにはほんのわずしか理解できなかったのです。それでもどうか、町に行くようにと勧めているのだということが分かりました。そこで、つぎの朝、ペドロは町へ出かけて行きました。

町に着くと、ペドロは、いろんな人たちに帰り道をたずねましたが、だれも分かりませんでした。すっかり疲れ果ててとうとうに暮れていると、身なりのいい大きな男が馬に乗って通りかかりました。ペドロは、その馬に見覚えがありました。男は、あの晩は暗くて顔が見えませんでした。たしかにペドロを連れてきた統率者でした。

「ああ、あなたでしたか」と、ペドロはさげびました。「逃げた盗賊を追っているうちに道に迷ってしまい、帰り道が分からなくなってしまいました。この人たちは、だれもわたしの村を知らないのです、すっかりこまっていたところです」

男は、

「心配しなくてもいい。後でだれかに帰りの道を案内させよう。でも、せっかくこの町に来たんだから、わたしの家に来てほしい。この前、手を貸してくれたお礼に、ゆつくりくつろいでいってくれ」といいました。

男は、ペドロを、町のまんなかにあるりっぱな屋敷に連れて行きました。男は、金持ちの伯爵でした。ペドロは、そこでの暮らしが、すっかり気に入りました。

何日かすると、ペドロは、そろそろ家に帰ろうと思いました。すると、伯爵が、

「もう少しここにいてはどうかね。きみの父上には、いつ帰るかはすでに伝えてある。そのときが来たら、間違いなく帰してあげるよ」といいました。ペドロは、もう少しその町にとどまることにしました。

一年たつて、ペドロは、伯爵の娘と結婚しました。伯爵は、若いふたりのために、ごうかな屋敷を建ててくれました。

ペドロは、すっかり町の暮らしになじみ、ちゃんとした仕事にもつきました。妻とのあいだには息子や娘が何人も生まれました。ペドロはとても幸せでした。ときおり、故郷の両親や弟妹のことがなつかしく思い出されましたが、そんなときにはいつも伯爵が、こういってなぐさめました。

「まだまだ急ぐことはない。約束のときまでに家に帰れるさ」

こうして、また何年かが過ぎました。ペドロにはもう孫がいましたが、家に帰りたい気持ちにはますます強くなりました。ある晩、年輩いた伯爵にいいました。

「あした、家の者たちに会って来ようと思います」

「どうしても帰るといえるのか」

「はい。父も母もとうに亡くなっているでしょうが、弟や妹たちは、まだ生きていると思います」

「それじゃ、あした、だれかに道を案内させよう」

つぎの日、ペドロは、弟妹たちへの贈り物を馬に積ませると、妻や子どもたち、孫たちに別れを告げて出発しました。伯爵の家に案内されて、昔、盗賊を追って来たとき渡った川の所にやって来ました。伯爵の家来は、

「わたしのお供はここまででございます。この川を渡れば、道はすぐにお分かりになるはずです」といって、もどって行きました。

川を渡ると、あたりの景色に見覚えがありました。ペドロは、一日じゅう馬を飛ばして、夕方には故郷の家にたどり着きました。

「おーい、今はだれが、この家の主なんだ」と、ペドロは家の中によびかけました。すると、父親が出て来て、

「失礼ですが、あなたはどなたです」と聞きました。

「お父さん、わたしが分らないんですか。お父さんは昔のまま、ちっとも変わっていませんね」と、ペドロがいうと、父親はいいました。

「ご老人、いったい何をおっしゃっているんです。わたしはこれまで、あなたにお会いしたことはありませんが」

「お父さん、息子のペドロですよ」

そうこうするうちに、母親と弟妹たちが家の中から出て来ました。父親はいいました。

「そんなまっ白いひげを生やしたあなたが、どうしてわたしの息子なんです。息子のペドロは、きのうの晩、盗賊をひつとらえるために出て行きました。今夜にはもどるはずですから、このままここでお待ちになって、ご自分の目で確かめられたらいいでしょう」

ペドロは、ますます訳が分からなくなって、馬から下りると、

「なんですって。あなたの息子さんは、きのう出かけたとおっしゃるんですか」といいました。

「そうですよ。どうして、そんなふしぎそうな顔をなさるんです」

父親は、この老人が気の毒になって、家に入れてやりました。ペドロは、すぐに、いつもの自分の席に腰を下ろしました。そして、周りを見まわしながらいいました。

「おまえはファンだな。こっちはカルロスにドロレス、そして、ドロテアとマリアナだ」

父親は、この高貴な身なりをした老人をじっと見つめながら、

「ご老人、この子らの名前をどうしてご存知なんです」と聞きました。ペドロは、それには答えず、家の者しか知りようのないあれこれを、次つぎにいつてみせました。そこで、両親も弟妹たちも、この老人が、前の晩に馬に乗って出て行ったペドロだということを、信じないわけにはいけなくなりました。

ペドロは、家の者たちに、逃げた盗賊を追って川を渡り、ある町に行ったこと、そこで伯爵の屋敷に世話になり、その娘と結婚したこと、さらに、子どもや孫までもいることを話して聞かせました。

しばらくのあいだ、どこでも、ペドロのこのふしぎな話で持ちきりでしたが、もうそれも昔のことになりました。

お話はこれでおしまい